琉球大学学術リポジトリ

地域スポーツ経営に関する研究 (2) : スポーツ活動に影響を及ぼす要因分析

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-08-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 並河, 裕, Namikawa, Yutaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1356

地域スポーツ経営に関する研究（2）
～スポーツ活動に影響を及ぼす要因分析～

並　河　　裕*

A Study on Management of Sports and Physical Recreation in Community (2)
～Analysis of the Factors Influencing Sports Activity～

Yutaka NAMIKAWA*

Abstract

The purpose of this study was determined the factors influencing sports activity. Analysis of data was made by Hayashi's Quantification Theory (Ⅱ) which categories both a man and an item, and both quantative and qualitative elements simultaneously.

Thirty-eight items which consisted of such elements as demographic elements, relating to sports activity, sport consciousness and sport conditions were employed as explanatory variables.

Subjects were 419 adult people of both sexes (male 216 : female 203).

Main results may be summarized as follows :

1. Discriminant analysis among sport activities was conducted according to the explanatory variables created in the present research. The result showed that correlation ratios differed with frequencies of sport activities.

2. The examination on the contribution strenght of individual elements was conducted by partial correlations. The results showed that main elements affecting sport activities were occupation, feeling to be underexercised, a exercising companions, and educational background.

諸　言

近年、スポーツ人口の増大は著しく[10]さらにスポーツ活動形態も自由時間の増大、ライフスタイルの変化、それに伴う価値観の変容により様々である[7]。個人が生涯にわたってスポーツ活動を実践する生涯スポーツの振興の方策を充実、推進していくことの重要性が指摘されている[10]。

余暇やスポーツに関する諸研究により、スポーツ実施が性や年齢等の人口統計的属性や、社会的属性、さらにはスポーツを取り巻く仲間、指導者、施設等の環境的諸条件により直接、あるいは間接的に影響を受けていることは明らかにされてきた。スポーツ活動の振興方策を考える上でスポーツ活動に影響を及ぼす要因を明らかにすることは非常に重要である。従来のスポーツ活動に関する研究を見てみると、松永[9]らの長崎県民の健康・スポーツに関する研究、札幌市の健康・スポーツに関する調査報告[12]などスポーツ活動の実態報告、人々のスポーツとの関わりからスポーツ実践に参加する要因を社会学的見地から研究したもの[6][13][14][22]、また荒井[1]、松田[8]のスポーツ活動を構成する活動主体と客体とのメカニズムを解明にするためのスポーツ行動に関する一連の研究、八代[22]、畑[3]の運動者行動の見地から運動者の経

*Phys. Educ., of Educ., Univ. of the Ryukyus

済的要因や主体的条件がスポーツ活動にどのように関わっているかを分析したもの、さらに金崎[5]ら、徳永[19)20)22)]らの社会学的要因、心理的・身体的要因、男女・年代別比較などからスポーツ行動を予測するためのモデルを作成しようとしたもの、多々納[16)17)18)]らの多変量解析によりスポーツ参加に関わる要因を分析したもの、そしてスポーツ活動のライフスタイルの研究からスポーツ行動を解明しようと試みたもの[2)4)]などさまざまな研究がなされている。しかし、これらの研究はスポーツ活動の実態調査であったり、スポーツ行動に至るまでの要因を分析したものが多くスポーツ活動の継続に直接的あるいは間接的に影響を与えるような要因について分析検討したものは少ないと言える。

そこで本研究は、従来の研究で用いられている人口統計的要因や主体的要因及び客体的要因、さらにスポーツ実施者が、スポーツ活動を成立、維持させるうえに最も必要な条件として掲げた要因等を用い、活動頻度によりスポーツ実施群、非実施群とに分け、スポーツ活動を成立・継続させる要因の分析を試み、スポーツ実施・非実施に影響を及ぼす要因の探求を研究目的とした。

研究方法

1．調査の概要

(1)　調査対象

沖縄県中部地区を中心に、公民館のサークル等でスポーツ活動を実践している人々、あるいはスイミングクラブや同好会等の、なんらかのクラブに所属してスポーツ活動を行っている人々のなかで18才以上の一般成人を対象に質問紙調査を実施した。

(2)　調査方法と時期

質問紙調査方法により、地区の公民館を通してまたは同好会やクラブの代表者を通じて調査票を配布し回収した。調査は平成２年11月～12月に実施した。

(3)　調査票の配布と回収

男女それぞれ300名に配布し回収率70.1%、有効回答率69.8%、総計419名（男子216名、女子203名）の有効回答が得られた。

2．取り扱う変数

荒井[1)]らは、スポーツ行動の社会的、心理的メカニズムの解明のため主体的変数と客体的変数を設定し分析を試みた。前者は健康というような個人内での調整、処理が可能なものであり、後者はスポーツ施設などのような集団としての対応が必要なものである。これらの主体的変数、客体的変数によりスポーツ行動に影響を及ぼす要因の分析を行っている。また、徳永[21)]ら、多々納[14)]ら、金崎[6)]らのグループは大学生のスポーツ行動を規定する要因に関する一連の研究報告の中で、スポーツ行動を外的基準とし、心理的・身体的要因、社会的要因、スポーツ関連要因等を説明変数として、各要因間の関連や外的基準との関連について詳細に報告している。

本研究では、外的基準を「スポーツ実施・非実施」とし、説明変数としては、年齢や性別等の人口統計的属性と運動経験やスポーツの好嫌度等の社会的要因を含めたものを主体的要因群とし、クラブ・サークルの所属や活動仲間、指導者の有無、施設の利用度や充実度等に関するものをスポーツ活動要因群、そしてスポーツ実施に必要な条件をスポーツ活動成立要因群として設定した。要因群における変数は表１に示される。

表１　分析に用いた要因群及びアイテム

要因群	アイテム
主体的要因	年齢
	性別
	職業
	学歴
	自由時間
	運動経験
	活動の趣旨
	スポーツの好嫌度
	健康状態
	運動不足感
	自己の運動能力
	運動活動感
	スポーツ大会、教室の認知度
スポーツ活動要因	クラブ・サークルの所属
	活動仲間
	指導者の有無
	指導者の必要性
	活動時間
	施設充実度
	施設の利用しやすさ
	目的の施設の有無
	施設の開放時間に満足
	使用料について
	使用金額は
スポーツ活動成立要因	健康である
	体力がある
	休日がはつきりしている
	勤務時間が決まっている
	運動仲間がいる
	公共施設が身近にある
	民間施設が身近にある
	公共施設使用料が安い
	民間施設使用料が安い
	クラブ・サークルがある
	スポーツが地域で盛ん
	社会がスポーツを奨励
	競技型の指導者がいる
	レク型の指導者がいる

3．分析方法

データの分析にあたっては、定量的属性の多変量解析である数量化理論第Ⅱ類による判別分析を主要な方法として採用し、その外的基準としては「スポーツ実施群」と「非実施群」である。つまり「スポーツ実施群」とは、5段階評価尺度による「スポーツ活動頻度」における、「毎日」（週4日以上）・「時々」（週1～3回）であり、「非実施群」とは、「ときたま」（月に2～3回）・「年に1、2回」・「しない」と回答したものである。説明変数としては、上記の主体的要因・活動要因・活動成立要因群からなる38変数を設定した。

結果と考察

1．外的基準と説明変数のクロス集計結果

スポーツ実施・非実施にたいする諸要因のクロス集計の結果は表2に示される。まず、要因群別に外的基準（スポーツ実施・非実施）とのクロス集計によるx^2検定の結果を要約する。

表2　外的基準と説明変数のクロス集計の結果

要因群	アイテム	x^2値	df	p値
主体的要因	年齢	66.4774	4	＊＊＊
	性別	0.0244	1	
	職業	59.5505	7	＊＊＊
	学歴	27.2073	4	＊＊＊
	自由時間	19.2389	2	＊＊＊
	運動経験	2.1942	1	
	活動の趣旨	12.6505	3	＊＊
	スポーツの好嫌度	6.3360	3	
	健康状態	2.0758	2	
	健康不足感	84.7063	2	＊＊＊
	自己の運動能力	15.7670	2	＊＊＊
	運動活動感	13.6254	4	＊＊
	スポーツ大会、教室の認知度	15.1066	1	＊＊＊
スポーツ活動要因	クラブ・サークルの所属	9.9026	1	＊＊
	活動仲間	3.0864	1	
	指導者の有無	4.8138	1	＊
	指導者の必要性	17.0515	1	＊＊＊
	活動時間	4.2851	5	
	施設充実度	23.6590	3	＊＊＊
	施設の使用しやすさ	19.9172	1	＊＊＊
	目的の施設の有無	18.1098	1	＊＊＊
	施設の開放弛緩に満足	15.5575	1	＊＊＊
	使用料について	2.7867	2	
	使用金額は	25.4540	4	＊＊＊
スポーツ活動成立要因	健康である	0.3431	1	
	体力がある	8.9718	2	＊
	休日がはっきりしている	13.1633	2	＊＊
	勤務時間が決まっている	16.2230	2	＊＊＊
	運動仲間がいる	2.5174	2	
	公共施設が身近による	7.1516	2	＊
	公共施設が身近にある	3.6847	2	
	公共施設使用料が安い	17.5768	2	＊＊＊
	民間施設使用料が安い	5.8385	2	
	クラブ、サークルがある	3.7194	2	
	スポーツが地域で参加	5.3657	2	
	会社がスポーツを奨励	10.4990	2	＊＊
	競技型の指導者がいる	4.8374	2	
	レク型の指導者がいる	1.1498	2	

＊＊＊…p〈0.001，＊＊p…〈0.01，＊…p〈0.05

① 主体的要因　外的基準に対して0.1%水準で有意差のみられたのは、人口統計的属性である年齢や職業及び学歴、さらに自由時間や健康不足感及び自己の運動能力、スポーツ大会・教室の認知度である。また1%水準のそれは活動の趣旨や運動活動感に認められた。非実施群は実施群に較べ、年齢では20代30代の占める割合が多く、職業は公務員・会社員・事務職等に携わる人が多く、さらに学歴では高学歴であるという傾向がみられた。また非実施群は自由時間がなく運動不足感を常に感じ、自己の運動能力を人並以下と感じているのが実施群に較べ非常に多い結果となっている。そして活動の趣旨は「レクリエーション型」を希望する人が非実施群に多く、さらに非実施群は非実施群に較べ時間があれば運動を実施したい、スポーツ大会・教室の認知度は低い傾向がみられた。

② スポーツ活動要因　指導者の必要性と施設充実度、そして施設の利用しやすさと実施の開放時間、さらに目的の実施の有無と使用金額においてスポーツ実施群・非実施群の間に0.1%水準の有意差が認められ、スポーツ実施群は施設の充実度、利用しやすさ、開放時間に満足している傾向がみられた。非実施群は指導者の必要性を常に感じており、また、スポーツ活動に使用される金額も実施群よりも多いという傾向が認められた。また1%水準で有意差のみられたのはクラブ・サークルに所属に、5%水準のそれは指導者の有無に認められた。非実施群はクラブ・サークルに所属していないものが多く、指導者も少ないという傾向がみられた。

③ スポーツ活動成立要因　外的基準つまりスポーツ実施・非実施に対して0.1%水準で有意差のみられたのは、退社・勤務時間が決まっていることと公共スポーツ施設の使用料金が安いことに認められた。1%水準のそれは休日がはっきりしていることと務めている会社がスポーツを奨励していることに認められ、さらに5%水準のそれは体力があることと公共スポーツ施設が身近にあることに認められた。このことは、スポーツ実施に公共スポーツ施設が身近にあり、かつ使用料金が低料金であることが強く影響していることが推測され、そして勤めている会社がスポーツ活動に対

して理解が必要であることを示している。スポーツ活動成立要因群はスポーツ実施者自らに回答を求めた「スポーツ実施にはどのような条件が必要か」を問うたものである。さらに非実施群のサンプルは必ずしもスポーツ活動を全く行わないものではなくなんらかのスポーツ実施しているものを含んでいる。このことがスポーツ実施群と非実施群にあまり差が認められない原因と推測される。そのなかで、公共施設使用料金が安いことと退社・勤務時間が決まっていることスポーツ実施・非実施との間に0.1水準で有意差が認められたのは、公共施設使用料の低料金化や労働時間の短縮等による手段がスポーツ実施を促進させる方策として有効であること示唆している。

2．スポーツ活動実施・非実施の要因分析

クロス集計及びx^2検定の結果から外的基準つまりスポーツ実施・非時実施の傾向を諸要因との関連からみてきたが、個々の要因と外的基準との関連を考察するのみでは諸要因間の相互作用などは無視される危険性を含んでいる。つまり要因間の相関が真の相関なのかあるいはその他の要因を媒介とした見かけ上の相関にすぎないのか不明確であり、外的基準に対する諸要因の相対的規定度も不明確なため誤つた結論に至る危険性を含んでいる。これらのことを解消するため数量化理論第II類を用いて分析を試みる。

①　判別の精度

スポーツ実施・非実施に諸要因がどのように関与しているか考察するまえに、まず判別の精度つまり各要因が外的基準をどの程度判別しているかをみると、相関比は0.7583であり、外的基準と諸要因との関係が不明確なこの種の研究では高い相関であると言える。以上のことは取り上げた各要因がスポーツ実施・非実施を比較的よく判別していることを示している。

なお、図1はサンプルスコアーによるスポーツ実施・非実施の判別異積グラフを示したものであり、スポーツ実施群と非実施群との重複部分が判別を誤る部分である。サンプルスコアーの最大値は0.96最小値は −1.06 で判別的中率は87.7%であった。

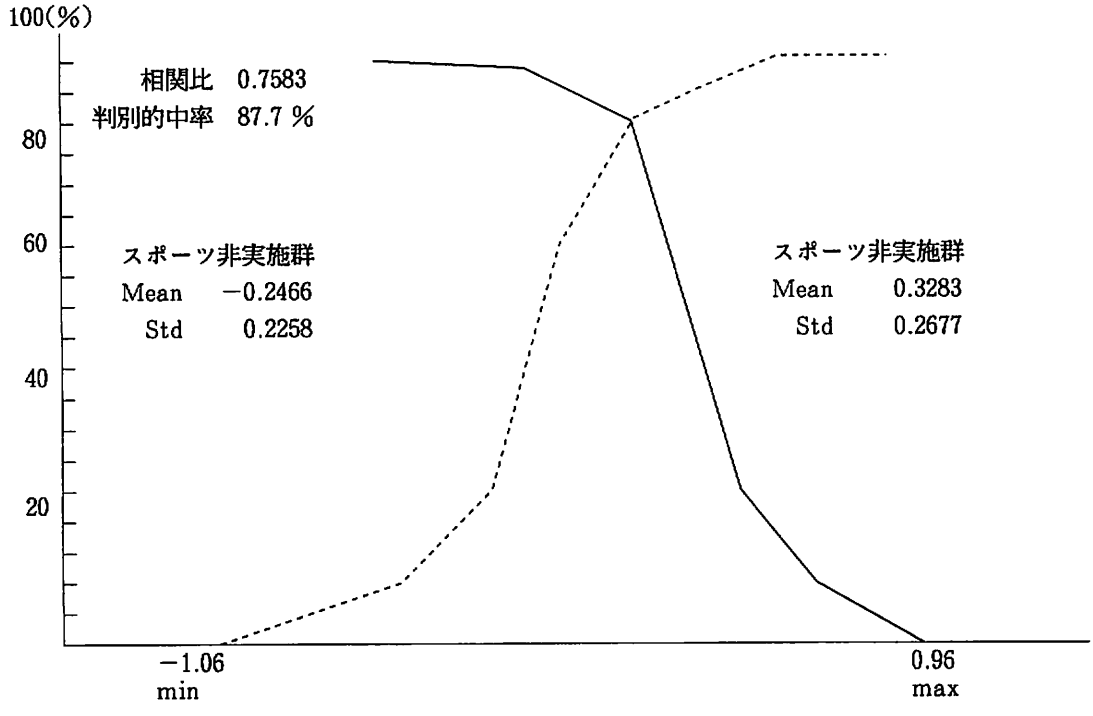

図1　スポーツ実施・非実施の判別異積グラフ

表3　要因分析の結果（数量化Ⅱ類）

アイテム	偏相関	カテゴリー	カテゴリースコアー	レンジ（順位）
年齢	0.2031	19〜29才	−0.1251	0.2397（11）
		30〜39才	−0.0371	
		40〜49才	0.0222	
		50〜59才	0.1099	
		60才以上	0.1146	
性別	0.0102	男性	−0.0037	0.0021（37）
		女性	0.0040	
職業	0.2813	農・漁業	−0.0982	0.5047（1）
		販売・サービス	−0.0321	
		公務員	−0.2038	
		事務職員	−0.0453	
		会社員	−0.0001	
		主婦	0.1116	
		無職	0.3009	
		その他	0.0042	
学歴	0.1176	中学校卒	0.0429	0.3533（4）
		高等学校卒	−0.0237	
		専門学校卒	0.1082	
		大学卒	−0.0063	
		大学院卒	−0.2451	
自由時間	0.0412	時間が無い	−0.0161	0.0502（30）
		時間がある	0.0125	
		非常にある	0.0341	
運動経験	0.1219	はい	0.0378	0.1032（21）
		いいえ	−0.0654	
活動の趣旨	0.2682	競技中心	0.2068	0.3210（6）
		リクリエーション中心	−0.1142	
		運動不足ストレス解消	0.0069	
		その他	0.0309	
スポーツの好嫌度	0.0772	非常に好き	0.0025	0.2126（12）
		好き	−0.0098	
		あまり好きでない	0.1487	
		好きでない	−0.0639	
健康状態	0.1296	丈夫	−0.0333	0.1727（16）
		普通	0.0446	
		弱い	−0.1281	
運動不足感	0.3298	いつも感じている	−0.1631	0.3735（2）
		時々感じている	−0.0423	
		感じていない	0.2104	
自己の運動能力	0.1032	普通以上	0.0323	0.1403（18）
		普通	0.0125	
		普通以下	−0.1080	
運動活動観	0.0887	時間を割いてでも	0.0482	0.3448（5）
		時間があれば	−0.0156	
		気が向いたとき	0.0153	
		誘われた時だけ	−0.2966	
		その他	0.0125	
スポーツ大会認知度	0.1131	知っている	0.0251	0.0994（23）
		知らない	−0.0742	
クラブ・サークル所属	0.0232	所属している	0.0100	0.0223（35）
		所属していない	−0.0123	
活動仲間	0.1317	はい	0.0141	0.1831（13）
		いいえ	−0.1689	
指導者の有無	0.0022	はい	−0.007	0.0021（38）
		いいえ	0.0014	
活動時間	0.1330	15分以内	−0.1483	0.2875（9）
		30分以内	0.0191	
		45分以内	0.1393	
		1時間以内	−0.0276	
		1時間30分以内	−0.0135	
		2時間以上	0.0209	
指導者の必要性	0.1326	はい	−0.0311	0.1141（19）
		いいえ	0.0830	
施設充実度	0.1237	非常にそう思う	0.0624	0.2997（7）
		そう思う	−0.0215	
		あまり思わない	−0.0154	
		全く思わない	−0.2373	
施設の利用しやすさ	0.0899	利用しやすい	0.0199	0.0949（24）
		利用しにくい	−0.0750	
目的の施設の有無	0.0109	はい	0.0018	0.0127（36）
		いいえ	−0.0109	
施設の開放時間に満足	0.0427	満足	0.0096	0.0388（33）
		不満足	−0.0292	
使用料について	0.0578	高い	−0.0585	0.0807（27）
		妥当	−0.0017	
		安い	0.0223	
使用金額は	0.1440	使わない	0.0381	0.1814（14）
		1000円以内	0.0291	
		1000〜2000円未満	−0.0761	
		2000〜3000円未満	−0.0042	
		3000円以上	0.1053	
健康である	0.0403	非常に大切	0.0022	0.1017（22）
		まあまあ大切	−0.0995	
体力がある	0.0816	非常に大切	0.0260	0.0708（28）
		まあまあ大切	−0.0328	
		あまり大切でない	−0.0448	
休日がはっきりしている	0.0446	非常に大切	−0.0113	0.0435（31）
		まあまあ大切	0.0322	
		あまり大切でない	−0.0055	
勤務時間が決っている	0.0409	非常に大切である	0.0199	0.0398（32）
		あまあま大切	−0.0199	
		あまり大切でない	0.0008	
運動仲間がいる	0.2197	非常に大切	−0.0272	0.3668（3）
		まあまあ大切	0.2238	
		あまり大切でない	−0.1430	
公共施設が近くにある	0.1594	非常に大切	0.0161	0.2967（8）
		まあまあ大切	−0.1411	
		あまり大切でない	0.1556	
民間施設が身近にある	0.0985	非常に大切	0.0344	0.0914（25）
		まあまあ大切	−0.0570	
		あまり大切でない	0.0060	
公共施設使用料が安い	0.1949	非常に大切	−0.0301	0.2807（10）
		まあまあ大切	0.0220	
		あまり大切でない	0.2507	
民間施設使用料が安い	0.1133	非常に大切	−0.0459	0.0909（26）
		まあまあ大切	0.0404	
		あまり大切でない	0.0450	
クラブ・サークルがある	0.1629	非常に大切	−0.0322	0.1469（17）
		まあまあ大切	0.1146	
		あまり大切でない	−0.0322	
スポーツが地域で盛ん	0.0745	非常に大切	0.0203	0.0590（29）
		まあまあ大切	−0.0375	
		あまり大切でない	0.0214	
職場がスポーツを奨励	0.1258	非常に大切	0.0102	0.1090（20）
		まあまあ大切	−0.0705	
		あまり大切でない	0.0385	
競技型の指導者がいる	0.1886	非常に大切	−0.0893	0.1807（15）
		まあまあ大切	0.0914	
		あまり大切でない	−0.0610	
レク型の指導者がいる	0.0317	非常に大切	−0.0050	0.0334（34）
		まあまあ大切	0.0118	
		あまり大切でない	−0.215	

(2)　要因の規定力順位

各要因のスポーツ実施・非実施についての偏相関、カテゴリースコアー及びレンジ幅は表３に示した。さらにレンジ幅からみた要因の規定力を１位から20位までを表４に示した。

表４　レンジ幅による要因の規定力順位

順位	アイテム	偏相関	レンジ幅
1	職業	0.2023	0.5047
2	運動不足感	0.3298	0.3735
3	運動仲間がいる	0.2197	0.3668
4	学歴	0.1176	0.3533
5	運動活動観	0.0887	0.3448
6	活動の趣旨	0.2682	0.3210
7	施設充実度	0.1237	0.2997
8	公共施設が身近	0.1594	0.2967
9	活動時間	0.1330	0.2875
10	公共施設利用料	0.1949	0.2807
11	年齢	0.2031	0.2397
12	スポーツの好嫌度	0.0772	0.2126
13	活動仲間	0.1317	0.1831
14	使用金額	0.1440	0.1814
15	競技型の指導者	0.1886	0.1807
16	健康状態	0.1296	0.1727
17	クラブ・サークル	0.1629	0.1469
18	自己の運動能力	0.1032	0.1403
19	指導者の必要性	0.1326	0.1141
20	社会スポーツを奨励	0.1258	0.1090

レンジの大きさから各要因の外的基準に対する規定力をみると、外的基準の弁別に最も寄与しているのは職業で、次いで運動不足感、運動仲間がいる、学歴、運動活動観、活動の趣旨、そして施設充実度、公共施設が身近にある、活動時間、公共施設使用料が安い、の順序である（以上10位まで)。さらに年齢、スポーツの好嫌度、活動仲間、使用金額、競技型の指導者がいる（15位)、となっている。この結果は、先に述べたクロス集計結果とはかなり異なる。クロス集計によるx^2検定では有意差の認められなかった運動仲間がいるは規定力では３位、活動時間は９位と上位に位置しており、さらにスポーツの好嫌度派12位、そして活動仲間、競技型の指導者が、それぞれ13位、15位と有意差の認められた要因よりも上位にある。x^2検定で0.1水準の有意差が認められた自由時間、スポーツ大会・教室の認知度がそれぞれ30位、23位に、さらに施設の利用しやすさは24位、目的の施設の有無（36位)、施設の開放時間に満足（33位)、勤務時間が決まっている（32位）と各々下位の方に変化している。１％水準で有意差の認められた運動活動観と活動の趣旨は５位、６位にクラブ、サークルの所属は17位、そして休日がはっきりしていると会社がスポーツを奨励は、それぞれ31位、20位であった。さらに要因群別に検討してみると、主体的要因に設定した要因は規定力順位では上位に位置するものが多くスポーツの実施・非実施に強く影響を与えていることが認められる。スポーツ活動要因群はクロス集計結果とはかなり異なり、施設の充実度（７位）を除いてすべて規定力は弱く、外的基準の弁別にはあまり寄与していない結果となっている。またスポーツ活動成立要因群では、有意差の認められなかった運動仲間がいることが規定力では３位とスポーツ実施・非実施にかなり強い規定力を示している。そして、５％水準で有意差のあつた公共施設が身近にあることが、0.1水準で有意差の認められた公共施設使用料金が安いよりことも規定力では上位に変化している。

(3)　カテゴリーの寄与と方向

ここでは、規定力順位20位までの要因を中心に各カテゴリーがスポーツ実施・非実施のどちらの方向にどれだけの強さで影響を与えているのかを見る。規定力順位20位までの要因のカテゴリースコアーの寄与の大きさと方向は図２－１、２－２に示される。

テアイム	レンジ幅	カテゴリー
職業	0.5047	農・漁業 販売・サービス 公務員 事務職員 会社員 主婦 無職 その他
運動不足感	0.3735	いつも感じている 時々感じている 感じていない
運動仲間	0.3668	非常に大切 まあまあ大切 あまり大切
学歴	0.3533	中学校卒 高等学校卒 専門学校卒 大学卒 大学院卒
運動活動観	0.3448	時間を割ってでも 時間があれば 気が向いた時 誘われた時だけ その他
活動趣旨	0.3210	競技中心 レクリエーション中心 運動不足ストレス解消 その他
施設充実度	0.2997	非常にそう思う そう思う あまり思わない 全く思わない
公共施設が近	0.2967	非常に大切 まあまあ大切 あまり大切
活動時間	0.2875	15分以内 30分以内 45分以内 1時間以上 1時間30分以内 2時間以上

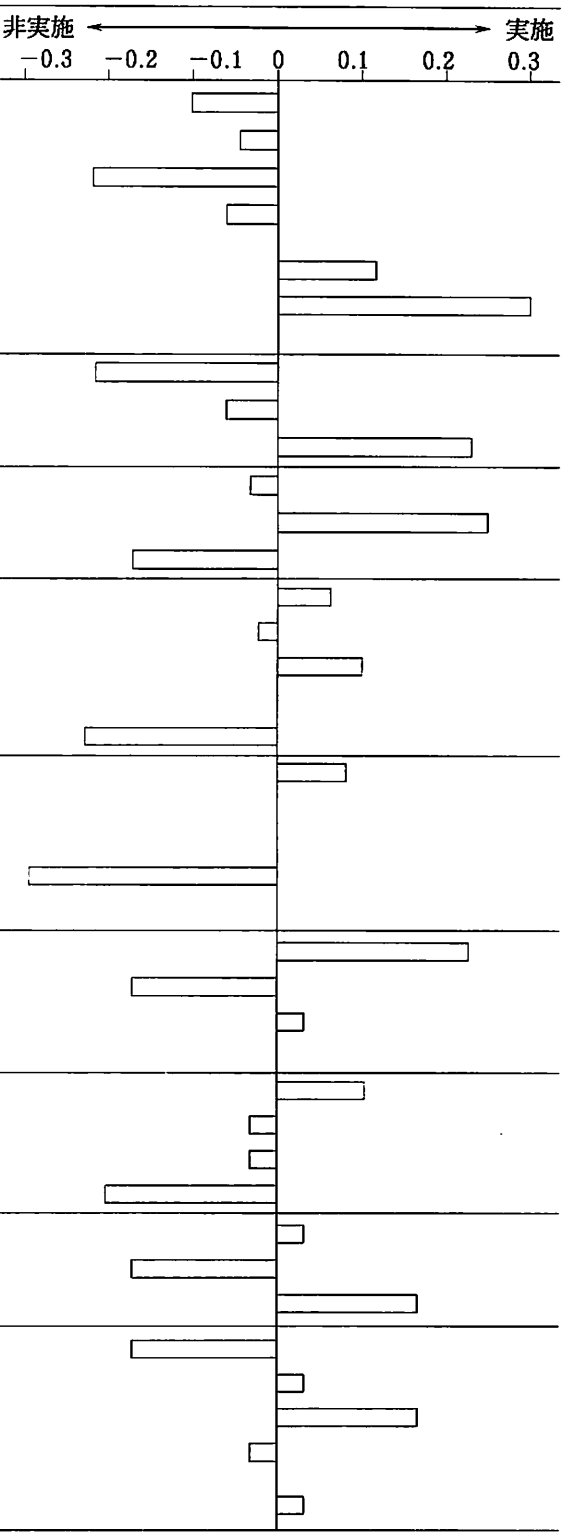

図2—1　カテゴリースコアーの寄与と方向（その1）

アイテム	レンジ幅	カテゴリー
公共施設使用	0.2807	非常に大切 まあまあ大切 あまり大切でない
年齢	0.2397	19〜29才 30〜39才 40〜49才 50〜59才 60才以上
スポーツ好嫌度	0.2126	非常に好き 好き あまり好きではない 好きではない
活動仲間	0.1831	はい いいえ
使用金額	0.1814	使わない 1000円以内 1000〜2000円以内 2000〜3000円以内 3000円以上
技術型指導者	0.1807	非常に大切 まあまあ大切 あまり大切
健康状態	0.1727	丈夫 普通 弱い
近くにクラブサークル	0.1469	非常に大切 まあまあ大切 あまり大切でない
自己運動能力	0.1403	普通維以上 普通 普通以下
指導者必要性	0.1141	はい いいえ
社会がスポーツを奨励	0.1090	非常に大切 まあまあ大切 あまり大切でない

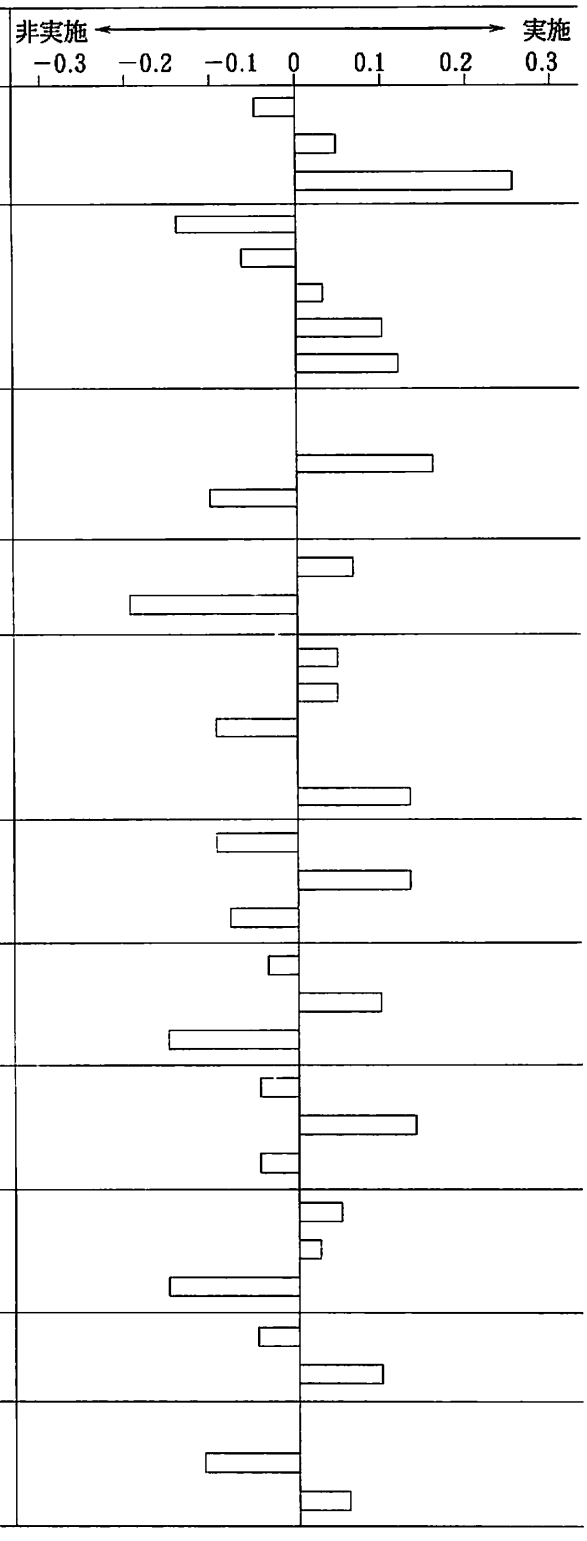

図2—2　カテゴリースコアーの寄与と方向（その2）

図2－1、2－2から

・正しい高いスコアー……職業「無職」・「主婦」、運動不足感「感じていない」、運動仲間「まあまあ大切」、活動の趣旨「競技中心」、公共施設使用料が安い「あまり大切でない」、公共施設が身近に「あまり大切でない」、活動時間「45分以内」、スポーツ好嫌度「あまり好きでない」、身近にクラブ・サークルがある「まあまあ大切」、年齢「60才以上」・「50～59才」、その他

・負の高いスコアー……運動活動観「誘われた時だけ」、学歴「大学院卒」、施設充実度「全く思わない」、職業「公務員」・「農・漁業」、運動不足感「いつも感じている」、活動仲間「いいえ」、活動時間「15分以内」、運動仲間「あまり大切でない」、公共施設が身近に「まあまあ大切」、年齢「19～29才」、健康状態「弱い」、自己の運動能力「普通以下」、その他

などがあげられる。従って、スポーツ実施に対してプラス方向に強い影響を与えるのは、職業が無職あるいは主婦であること、スポーツ活動には運動仲間が必要であると考えていることなど、そして、活動の趣旨が競技中心で運動不足をあまり感じていないことなど、さらに施設使用料が安いのは、必ずしもスポーツ実施の条件とは言えないと考えていることなどであり、逆にマイナス方向つまり非実施に強い影響を与えているのは、人に誘われてスポーツを実施するといったスポーツ実施に至る動機が他律的であること、学歴が高学歴であること、現状のスポーツ施設に満足していないこと、さらに職業が公務員あるいは農業・漁業に従事していること、運動不足をいつも感じていること、そしてスポーツ実施に運動仲間を必要とせず且つ活動仲間がいなくて、健康状態も悪いと感じていることなどである。これらの特徴をクロス集計の結果と比較すると、施設に関する要因についてクロス集計とは異なる結果が見られた、つまり公共のスポーツ施設が身近にあることが、スポーツ実施群にはあまり重要と考えられてなく、むしろ非実施群のほうが公共のスポーツ施設が身近にあることを強く望んでいるという傾向がみられた、さらに、公共施設使用料金が安いこともスポーツ実施に強く影響を及ぼさないという結果がみられた。その他の要因についてはクロス集計の結果とほぼ一致している。このことは、各カテゴリーの反応パターンからスポーツ実施・非実施の傾向を推定したことの有効性を示していると考える。

要　約

本研究は、スポーツ活動に影響を及ぼす要因について、スポーツ実施群と非実施群の比較を数量化理論第Ⅱ類による判別分析を採用して研究を進めてきた。結果を要約すると以下のようになる。

1．各要因のスポーツ実施・非実施に対する影響の度合いをレンジの大きさからみた規定力順位は、職業が1位、次いで運動不足感が2位、運動仲間がいるが3位、そして学歴（4位）、運動活動観（5位）であった。職業はその人の所得や生活行動を規定し、従ってスポーツ活動についても大きな影響を及ぼす要因と考えられる。本稿でも職業は規定力順位では1位であり、スポーツ実施・非実施に最も影響を与えることが認められた、さらに、運動仲間がいると、個人の運動不足感、学歴及び運動活動感等がスポーツ実施に影響を与えていることが確認された。

2．カテゴリーの寄与と方向からスポーツ実施・非実施に対する影響を分析した結果。

スポーツ実施…職業「無職」・「主婦」、運動不足感「感じていない」、運動仲間「まあまあ大切」、活動の趣旨「競技中心」、公共施設使用料が安い「あまり大切でない」などがスポーツ実施に影響を与えている。このことは、スポーツ活動に対して余暇時間が強く影響を与えていることを示しており、また公共施設の低料金化がスポーツ活動の促進にあまり影響を与えていないことについては、これからの公共スポーツ施設の在り方や有効活用を考えるうえで検討される課題である。

スポーツ非実施…運動活動感「誘われた時だけ」、学歴「大学院卒」、施設充実度「全く思わない」、職業「公務員」・「農・漁業」、運動不足感「いつも感じている」などがスポーツ非実施の方向に影響を与えていることが確認された。なお、施設に関する要因がスポーツ実施にたいして比較的低い規定力を示したことは今後さらに検討を要する課題である。

今後の課題としては、地域スポーツ経営の研究を進めるにあたって、地域スポーツの振興に必要な条件とされるスポーツ施設やスポーツ活動者の欲求に応える運動プログラムに関する研究が必要とされると考える、さらに、近年の社会動向として個人の価値観の変容それに伴うライフスタイルの変化が進み、このことはスポーツの分野においても例外でなく、これからのスポーツ振興を発展させて行くためにはスポーツの価値観や個人のライフスタイルの研究の必要性を強く感じ、これらの研究を進めることで今後の地域におけるスポーツ経営に貢献して行きたい。

参考文献

1）荒井貞光、松田秦定（1977）スポーツ行動に関する実証的研究(2)、体育学研究、22－2、pp. 137—152

2）原田宗彦、菊池秀夫（1990）スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究、体育学研究、35、pp. 241—251

3）畑　攻、宇土正彦、八代　勉（1984）運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究、筑波大学体育科学系紀要、7、pp. 11—19

4）岩井浩一、大山良徳、山下秋二（1988）中高年者のライフ・スタイルと健康に関する研究、大阪大学健康体育部紀要、3、pp. 67—73

5）金崎良三、多々納秀雄、徳永幹雄橋本公雄（1981）スポーツ行動の予測因に関する研究（Ⅰ）～社会学的要因について～、健康科学、3、pp. 55—69

6）金崎良三、多々納英雄、徳永幹雄、橋本公雄（1982）学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3)～スポーツ関連要因について～、健康科学、4、pp. 77—89

7）厨　義弘、大谷義博（1990）地域スポーツの創造と展開、大修館書店、pp. 262—276

8）松田秦定、東川安雄、荒井貞光（1978）、スポーツ行動に関する実証的研究(3)～スポーツ種目選択行動について～、体育学研究、24—1、pp. 1—11

9）松永淳一、神　文雄（1981）長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究～成人の運動生活について～、長崎大学教育学部教科教育学研究報告、5、pp. 113—132

10）文部省体育・スポーツ研究会（1990）すぽ～とピア21「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」（答申解説）、株式会社体育施設出版、P. 164

11）永吉宏英、江橋慎四郎、粂野　豊、島崎　仁（1974）スポーツ活動成立要因に関する研究、日本体育学会第25回大会号、P. 187

12）札幌市教育委員会（1989）市民の健康・スポーツに関する調査研究報告

13）丹羽劭昭、村松洋子（1978）女子大学のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究、体育学研究、24—1、pp. 25—38

14）多々納秀雄、金崎良三、徳永幹雄、橋本公雄（1982）学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(2)～社会的要因について～、健康科学、4、pp. 51—76

15）多々納秀雄、厨　義弘（1980）スポーツ参加の多変量解析（Ⅰ）～数量化理論第Ⅱ類による要因分析～、健康科学、2、pp. 103—118

16）多々納秀雄、厨　義弘（1980）スポーツ参加の多変量解析（Ⅱ）～数量化理論第Ⅲ類によるパターン分析～、健康科学、2、pp. 118—140

17）多々納秀雄・徳永幹雄・金崎良三・橋本公雄（1981）スポーツ種目のパターン分析と関連要因の分析～大学生の事例から～、体育学研究、26—4、pp. 269—285

18）徳永幹雄、橋本公雄、多々納秀雄、金崎良三（1980）スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究（Ⅱ）～ランニング実施者と非実施者の諸属性の比較～、健康科学、2、pp. 91—101

19）徳永幹雄、橋本公雄、金崎良三、多々納秀雄（1981）スポーツ行動の予測因に関する研究(2)～心理的・身体的要因のついて～、健康科学、3、pp. 71～85

20）徳永幹雄、橋本公雄、金崎良三、多々納秀雄（1984）スポーツ行動の予測因に関する研究(3)～男女・年代別の比較～、健康科学、6、pp. 129—140

21）徳永幹雄、橋本公雄、多々納秀雄、金崎良三

（1982）学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究 (1)～ 心理的・身体的要因について～、健康科学、4、pp. 35—49
22）八代　勉・宇土正彦・畑　攻・柳沢和雄（1981）運動者行動に関する研究～特に、スポーツに対する購買意識の分析を中心にして～、筑波大学体育科学系紀要、4、pp. 29—39